

THE JOURNAL OF
JAPANESE HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol. 1, No. 1

1966

— 目 次 —

発刊之辞	朝比奈泰彦	1
薬史学雑誌に寄せる	村山義温	1
山科撫作先生を想う	吉井千代田	2
(原 報)		
紫草の文献学的研究	三浦三郎	3
わが国医薬分業の失敗理由	清水藤太郎	11
(綜 説)		
わが国における自然科学教育の芽生え —近代薬学発祥時期の背景—	吉井千代田	14
(史 料)		
下総薬園考	三堀三郎	20
リュードルフ・レーマン小伝	木村雄四郎	22
(随 想)		
八十歳をこえて (遺稿)	山科撫作	26
(学 会)		
日本薬学大会・薬史学部会講演集 (昭和30~40年)		28
会 則		33
あ と が き		32

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

薬史学誌

J. His. Pharm.

日本薬史学会

新しい調剤・製剤学の集大成！

薬 剤 学 理 論 ・ 応 用

京都薬科大学教授 内藤 俊一 著 B5判 定価 3,800円

本書は調剤学はもちろん、最近クローズアップされてきた、医薬品の安定性予測に関する理論、化学工学的な基礎、生物薬剤学（吸収・排泄・代謝）、製剤技術など多方面にわたり3,400余の文献を掲げて、新しい薬剤学の理論と応用面を、初学者にもきわめてわかりやすく系統的に解説したわが国唯一の書。医薬品製剤製造上のキー・ポイントと、できた製剤の正しい評価方法を理解しやすく詳説した。学生はもとより研究室・現場・病院薬局などの技術者・薬剤師の必携書として自信をもっておすすめする。

☆調剤学編は調剤指針を基本にして従来の薬剤学をまとめた。

☆製剤学編は本書の中核をなすとともに性格・特徴を最も強くあらわしている。すなわち複雑な医薬品の経時変化を熱力学、熱化学を用いて予測する手段、ひいては医薬品の安定化への応用、医薬品の吸収・排泄速度の求め方、それより正しい薬用量の定め方などについて450余頁にわたり、100余の図表を随所に挿入して、詳細・明快に解説した。

主要目次……化学工学的基礎事項 医薬品の安定性および安定化 医薬品の吸収・分布・排泄（生物薬剤学） 製剤技術 製剤処方

☆医薬品および製剤中の医薬品の定性・定量編では、将来の発展が期待され、また必要とされる製剤中の医薬品定性・定量法を確立するための足場として、関連文献の分類を行なって記述した。

私は本書を推薦します

三楽病院薬局長 不破龍登代

薬剤学に関する専門書はその部分部分につき著されたものはあるが、本書のように薬剤学全体を把握し一括した、いうなればこれが薬剤学であると明確に表徴しうる成書は今までになかった。これが嚆矢といえよう。著者は序に数年の時日を費やし、薬剤学の解説、系統化を企図したといわれているが、その内容を一見しただけで、まさにその通りと烙印が押せる。よくB5判735Pにわたる大書をものにされたものと敬服せざるを得ない。……さればこれこそ小生が従来念願していた待望の書といえる。薬剤学講義用教科書としてまた開局業者、製剤研究者の参考書として必携の書として余りある書と確信する。

大 改 定 版 厚生省薬務局推薦 [好評発売中！]

第七 改正 日本薬局方第二部解説書

日本公定書協会 編集 A5判 定価 3,000円

本書の特色

薬局方第二部は昭和41年4月1日、厚生省告示第163号をもって全面的に改定、多数の品目が入れかわり（新収載品目373品目）、各条内容も全面的検討が加えられ大改定された。本書の特色は薬局方原案担当者が、詳細かつ正確な「注」および「解説」を執筆したことにあり、したがってその「解説」は単なる説明にとどまらず、実験上の注意、実験データ等を多数記載している。新第二部には、製剤、生薬、製剤原料が主として収載されたが、これら各条の医薬品についても懇切な解説がなされている。名実ともに「正確かつ權威ある」解説書として、広く薬学、医学、関係者の必携書として自信をもってお奨めする。

東京都文京区本郷三丁目27-14
振替東京 82694 番・電話 (814)5561



廣 川 書 店

発 刊 の 辞

朝 比 奈 泰 彦*

従来わが国の薬学史は、医学史の一部として取扱われたために、薬学自身の発達に重要な史実を軽視したり、見逃したりした場合が少なかったと信ずる。今後は本会々員諸君の努力で、これら材料の発見と適正な評価を掲載し、本誌を薬史学の一權威に推進されんことを期待してやまない。

薬史学雑誌に寄せる

村 山 義 温**

中国の昔の本のなかに「古きを温ねて新しきを知る」という諺がある。史学は昔のことを調べ現代に及び、それを将来の見通しにするのが役目であると思う。われわれの薬史学も史学の範囲内である以上、過去の事績の詮索ばかりでは役目がすまされない。

今やわが薬学は有機化学を基礎として、それに植物学を配して進んで来た過去から、今は物理化学的なものを多分に加味しなければならない状況となり、謂わば曲り角に来たとか壁にぶつかったとかいう時期である。ところで「ろ山に入ったものがろ山が判らない」という喩のように、薬学当事者よりも傍から見ている者の方が判るように、薬学として脇役の立場にある薬史学者の方が反って薬学の将来の見通しということに役に立つかも知れない。その意味で薬史学の発展は重要であり、従って此際薬史学雑誌を発刊することは意義ある企てである。切にその発展を祈る。

* 東大名誉教授・日本薬史学会会長, **東京薬科大学名誉学長

山科樵作先生を想う

吉井千代田

本会の生みの親であり、育ての親でもあった山科樵作先生は、昨年（40年10月21日）82才で亡くなられ、その後、幹事会、あるいは集談会、史跡めぐり等が開かれても、ふたたびその温容に接することができなくなった。

この事は、われわれ幹事たちが、会の仕事を進めていく上にも、何かよりどころを失ったような気持ちがしてならないばかりでなく、それから1年余りたった今日でも、先生に対する哀悼、追慕の念は絶えることがない。

ひとり本会のことばかりでなく、学界、業界の長老として、各種の催し、会合等の企画あるいは運営の相談にあずかるほか、それらを実施するための費用の調達等に関しても、自ら東奔西走する労をいとわず、自他ともに許す世話人として、常に推進的な活動を示されたこともよく知られていた。

「三共」に在ること50余年、この間明治、大正、昭和の三代にわたる体験を背景として、わが国の製薬工業発達の跡を語り、また「三共茶ばなし」等の著書をのこし、わが製薬業界の側面史をえがくことに健筆をふるわれたことは、薬史学に関心を抱くわれわれにとっては、かけがえのない貴重な存在であった。

まず薬学を勉強しようとする者は、生薬学のごとき天然物たると、化学合成品たるとを問わず、およそ薬物に関する過去の業績、薬学教育あるいは製薬業の今日にいたるまでに移り変ってきた姿を知らなければならないと

して、卒先して薬学の史的研究を促すために、本会創設の要を強く提唱されたのであった。その結果生まれたのが、ほかならぬ日本薬史学会であったが、一方、自ら薬科大学で、初めて薬学を学ぼうとする、自分の孫のように若い学生たちに対しても、薬学史あるいは薬学教育、製薬の発達史について講義をされたのである。

「製薬工業発達史」の仕事に関して、おそれくだれよりも先生の晩年に接することの多かった私は、“薬学振興の一環として、薬学に関する史実を究めるために見聞をひろめて、うずもれている関係史料を掘り起し、収集したものを整理し、それにもとづいて史的考察を加えた研究成果を発表することの重要性を認めなければならない。薬史学会の仕事は、決して好事家による回顧的な趣味道楽を満足させているものではなく、一般の歴史と同じく、「温故知新」のほかに、今日のよってきたる因縁をたずね、将来の発展に役立てようとするものにほかならない”ということをし、くり返し語り合ったことも忘れられない。

機関誌発行という宿題に対して、ようやく答を出すことができた今日、これも先生の生前からの鞭撻によるものと有難く思うとともに、その創刊号に、はからずもこのような追憶文を載せなければならなくなったことを、ほんとに残念に想う。

ここに幹事会を代表して、つつしんでご冥福を祈りたい。

紫草の文献学的研究

三 浦 三 郎

Saburo MIURA: Studies on the ZICAO in the Philology

(Research Laboratories, Yamanouchi & Co. Ltd. *)

In this paper, the author intends to contemplate the character of the Japanese botany through the botanical classification of the contents of Chinese and Japanese botanicals about ZICAO.

中薬志¹⁾の記載における中国の紫草の対応植物の種属は下記の如くである。

- i) 新疆紫草 *Macrotomia euchroma* (ROYLE) PAULS (*Lithospermum euchroma* ROYLE)
- ii) 軟紫草 *Lithospermum officinale* L. var. *erythrorhizon* MAXIM. (*L. erythrorhizon* S. et Z.)
- iii) 滇紫草 *Onosma paniculatum* BUR. et FR.
- iv) 内蒙古所産の紫草 *Arnebia guttata* RGE.

しかるに、わが国に自生する紫草はムラサキ *Lithospermum erythrorhizon* S. et Z.

1 種類知られているに過ぎない。

これら紫草に関する過去の文献記述を採集し、その記載内容を分類整理することによって、中国および日本本草の性格について帰納的に論考せんとするのが本報の目的である。

1) 紫草の異物同名と同物異名；中国本

* Azusawa, Itabasi-Ku, Tokyo.

- 1) 中薬志 I 中国医学科学研究所等編(1961)
- 2) 三浦：採集と飼育 25 7 (1963)
- 3) 田中長嶺：“産業曼筆—江戸紫”筆稿本 (1892) 安井広氏蔵
- 4) 知里真志保：“分類アイヌ語辞典”I 植物篇 (1953)
- 5) 李勣・蘇敬：新修本草 卷6 草部中品 (岡西為人：重修新修本草 (1964) を引く)
- 6) 梯南洋：重修本草綱目啓蒙 卷7 (1844)

草に見られる紫草の異物同名と同物異名は Table 1²⁾ に示される。一方、わが国本草における紫草の異物同名と同物異名は Table 2²⁾ に見られる如く、中国本草の名称を悉く転載している。本草書以外にムラサキの別称は、下総の方言ノベニ³⁾とアイヌの薬草名 *Pewre-Kina*⁴⁾ が知られる程度である。

文字成立の原則からすれば、紫は苺を用いて染める色調の名である。従って紫染めに供用し得る植物全てが、紫草の総称得ても差支えない。紫草に多く見られる異物同名と同物異名は、呼称成立の過程から考察すれば、蓋然性認められることである。一方、“経史証類本草”において、紫菱は紫芙に作られ、この紫菱も紫芙とともに紫葳の誤記と推定されている。わが国本草において、これら誤称と思われるものも加えて、中国本草の異名全てを転載している事実は、わが国本草学者の先進文化を無批判に受け入れている自主性のない性格の一端を示すものである。

また、わが国最初の植物名彙である“本草和名”巻8において、“新修本草”⁵⁾巻20に蘇敬が有名無用の植物の一つとして分類する紫給を、“兼名苑”の引用名として掲載してある事実も見逃すことは出来ない。

2) 形態学的記載について：

i) 新修本草⁵⁾：苗似蘭香 茎赤節青 二月有花 紫白色 秋実白

ii) 重修本草綱目啓蒙⁶⁾：長じて苗の高さ二尺ばかり。葉は細長にして早蓮草（タカサ

Table 1. 紫草の物異名と本草文献系統図

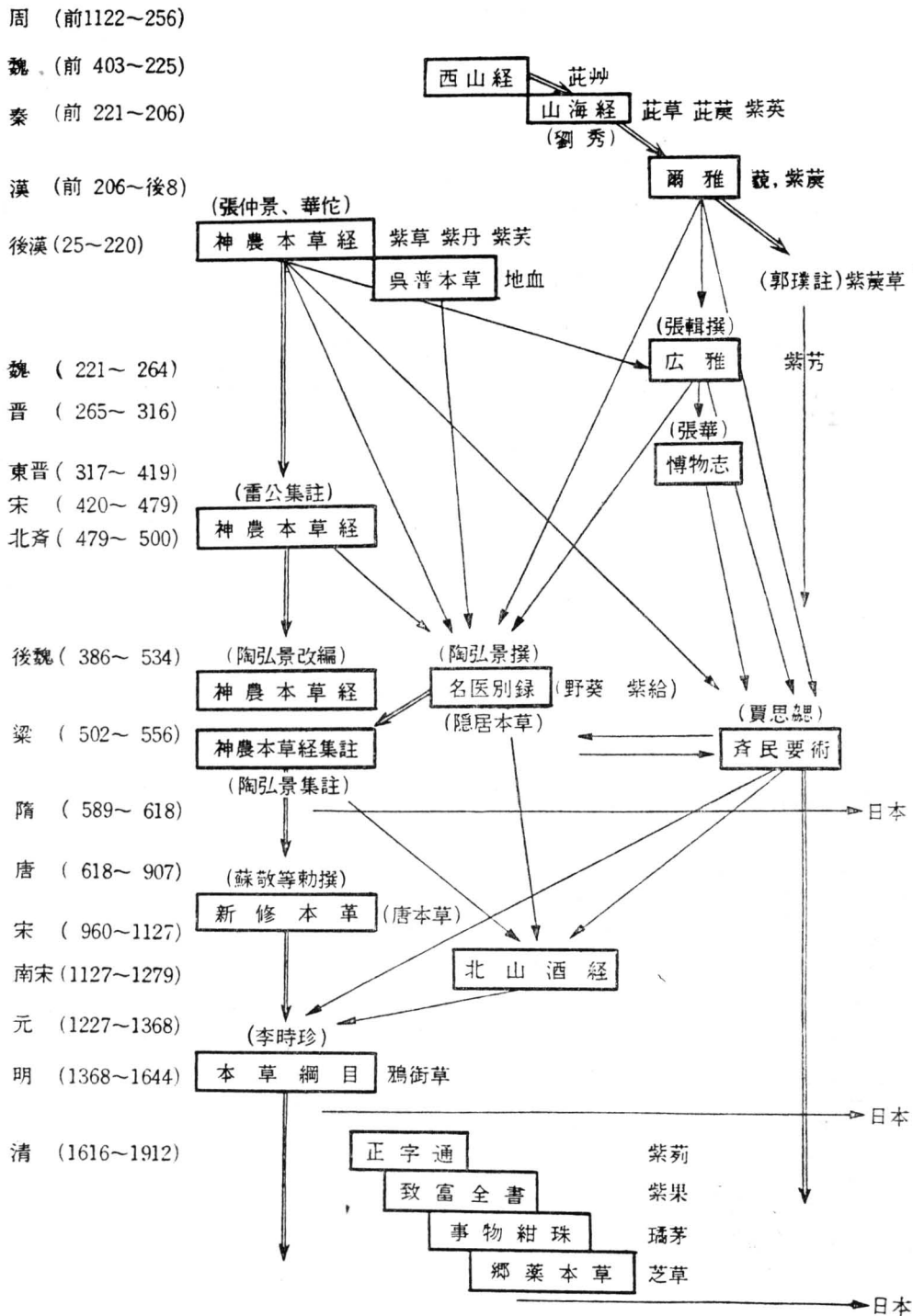


Table 2. 本邦の古文献に現われたいる紫草の同物異名

文 献 名	卷	年 代	名																称	和 名				
常陸風土記	行方郡	(713) 和銅6	紫 艸																					
東大寺正倉院 文書	卷42 豊後国正 税・帳	(736)	紫 艸																					
万 集 葉	卷1,3,4, 7,11,12, 14,16	(759)	紫 草																	紫 武良前 牟良佐伎				
本草和名 深江輔仁撰	卷8 中	(918) 延喜18	紫 草	紫 丹	紫 芙	(1) 野 薔	紫 給	此 蔎	(2) 紫 蔎	(3)										无良佐伎				
源順撰 倭名類抄	卷14 染色具	(931) (937)	紫 草																	无良散伎				
和 國 雅 貝原好古編	卷7 草 木	(1694) 元禄7	紫 草	紫 丹	紫 芙	(4) 野 薔			此 蔎											ムラサキ				
和漢三才図説 寺島良安編	卷92 山草類上	(1713) 天徳3	紫 草	紫 丹	紫 芙				此 蔎		地 血	鴉 街 草								无良佐木				
成形図説 曾占春撰	卷33 薬 部 第4山草類	(1831) 天保2	紫 草	紫 丹	紫 芙	(5) 野 薔	(6) 紫 給	(4) 紫 蔎	※		地 血	(7) 鴉 街 草	(8) 此 蔎	(9) 紫 英	(9) 紫 蔎	(6) 紫 蔎	(6) 紫 蔎	(10) 紫 蔎	(12) 紫 蔎	(13) 紫 蔎	(14) 紫 蔎	牟良佐伎		
重修本草綱目 啓蒙 藤南 洋撰	卷7 山 草	(1844) 弘化1	紫 草															紫 果	(11) 紫 蔎	(12) 紫 蔎	(13) 紫 蔎	(14) 紫 蔎	(15) 紫 蔎	ムラサキ ムラサキ 子 ムラサキ

文献中の傍註 (1) 出蘇杭註 (4) 諸爾雅 (7) 呉 普 00 致富全書 03 正 字 通
(2) 出兼名苑 (5) 別 録 (8) 綱 目 01 増訂致富奇書 04 鶴 本 草 04 鶴 本 草
(3) 出爾雅註 (6) 広 雅 (9) 山海經 02 (事物紀原) 05 江戸の方言 ※ 本草和名引兼名苑

ブrou) 葉の形の如く互生す。夏日枝梢葉ごと
に白花を開く、五出形梅花に似て、大き三分
許、内に葉なし。外に萼あり。亦互生にして
細長し。花謝して実を結ぶ。萼ごとに一二
実、形円尖にして紅藍花実に似て小し。熟し
て白色或は淡褐色を帯びて光あり。

iii) 成形図説⁷⁾：花に粉紅(ウスアカ)と
黄なるものあり。霜後は枯萎む。其初生へ
の歳は一根直下をなし。一茎二三枝を生じ、
年久しきは根数莖を分ち、数茎叢たてり。苗
の高さ尺許、茎円く葉は差互にして、胡麻の
茎立にひとしく、茎ともに洪毛あり。花は下
より次第に開上る。漸く茎嶺梢に至る故、終

夏に花絶ず。嶺梢の花開比、下花は既子を結
ぶ。子を結も花開次のごとし。秋に至りて熟
畢ぬ。形円尖て穆子(ひえ)に似たり。

以上、本草書における形態学的記述を考察
するに、新修本草に記述する紫草は *Macro-*
tomia あるいは *Onosma* の種類に属し、重
修本草綱目啓蒙は邦産種 *Lihosprum* の形
態について記述していることは明かである
が、島津農書の成形図説に記載する 牟良佐伎
の対応植物を詳かにすることは困難である。

中国歴代本草に掲載する紫草の本草図につ
いては、牧野富太郎博士は国訳本草綱目⁸⁾と
日本植物図鑑⁹⁾において、植物名実図考の本
草図はわが国のムラサキとその品種を異にす
るものとその見解を述べている。

3) 生態学的記述；

i) 齊民要術¹⁰⁾；種紫草 宜黄白軟良地
青沙地亦善 開荒黍稷下 大佳

ii) 常陸風土記¹¹⁾；野之土旰 然生紫艸
薬用植物の自生環境や生産的自然要因を明
かにすべき生態学的記載は、本草書において

- 7) 曾 榮、白尾図、曾占春：成形図説 巻33 葉
草部 第4山草類 静嘉堂 文庫 稿本(1804)
- 8) 白井光太郎校；頭註国訳本草綱目 第4冊
(1930) 春陽堂
- 9) 牧野富太郎；牧野日本植物図鑑 (1940) 北隆
館
- 10) 熊代・西山；後魏・賈思勰撰“齊民要術”巻5
(1958) 東大出版部
- 11) “常陸風土記”行方郡当麻郷(和銅5?)日
本古典文学大系 (1957) 岩波

中 国 の 紫 草 生 産 分 布 表

河南	湖北				湖南		江蘇		浙江			貴州		江西		福建							廣東	廣西	新疆	雲南	河北	安徽						
南陽	鄖陽	襄陽	安陸	宜昌	長沙	沅州	安慶	碭山	東山	衢州	処州	台州	貴州	黎平	吉安	贛州	建寧	延平	福寧	福州	興化	泉州	漳州	永春	汀州	広州								
○		○						○																										
○																○																		
					○										○																			

見出すことに出来ない。齊民要術は東アジア犁耕農法と犁耕文化を体系化した最古の農書であり、以後の農書の原典である。

わが国の風土記は世界最初の経済地誌と目される文献であり、両者の記載は紫草の生態学的記述であるとともに、両文献の性格を端的に示している。

4) 紫草の生産地と自生分布；中国歴代の通志を基ずる紫草の生産地は Table 3¹²⁾ に表示され、またわが国古文献にみられる紫草の関係地は Table 4 に表示される。わが国古文献の記載内容を価値判断する資料として、現在知られている ムラサキ自生分図¹³⁾を Fig.

Fig. 1 ムラサキの分布



1 に掲げてみる。

12) 小野玄妙編；“古文献に基く支那物産分布資料”（1940）東大・東方文化研究所

13) 奥山春季；“原色日本野外植物図譜” I （1954）から転載

14) 韓非子；外儲説左上〔伝〕五 伝説之以無衣紫

15) 兼原明衛；“新猿楽記”（弘安 9）（1282）

16) 中村省三；“南部むらさきの由来” 盛岡紫草園（1918）

17) 続東大寺正倉院文書 卷42 豊後国正税帳（天平 8）（736）

18) 大蔵永常；“広益国産考卷3”（文政6）（1859）

* 本草綱目を引く

中国歴代の各王朝は政治の要諦として、本草書の編纂や通志の作成を試みているも、わが朝の為政者に斯る努力の跡を見出すことは出来ない。また江戸末期の各地に派出されている採葉使たちの報告の如きも、植物分類地理学上、業績として認め難いものである。

5) 経済学的記録；

i) 韓非子¹⁴⁾； 齊恒公好服紫 一国尽服紫 当是時也 五素不得一紫 恒公患之

即ち、中国の春秋末期（前685～前643），紫服が盛行して紫糸が騰貴し、ために国民経済を逼迫した事情を叙述している。

ii) わが国においては、前記古風土記が生産学的感覚をもって紫草を取扱っている外、室町期において紫草は交易品の本朝物として大陸に輸出されており、¹⁵⁾¹⁶⁾ また江戸期における工芸植物、南部藩の専売品であった紫根の生産事情については、南部むらさきの由来¹⁶⁾に詳しく紹介されている。

6) 紫草栽培に関する記載； 中国における紫草の栽培法は、後魏の農書、山東・高陽大守賈思勰の撰す齊民要術¹⁰⁾に詳述され、中国歴代本草に説く紫草栽培法は何れも本書の内容を踏襲するものに過ぎない。本書に記述する栽培紫草は、春に播種してその年の秋に収根すべき品種に属している。

わが国の奈良朝に紫草園経営の記録がみられ¹⁷⁾、栽培法の実際については、江戸期における三大農学者の一人、大蔵永常の広益国産考¹⁸⁾に述べている。しかし、多年性草本である邦産種ムラサキを栽培するに当って、永常の経験は僅か2年で終わっており、しかも記述の中で中国本草に記載する紫草はわが国の紫草とその性を異にするものに非ずやと、疑問をいだいていた。

武蔵野に行われたムラサキ粗放栽培法の概略は産業曼筆一江戸紫³⁾に紹介されている。

陶弘景は、今出襄陽 多従南陽新野来 彼人種 即是今染者 薬都不復用* と、集約栽培の紫草は染色用に、自生の採集品は薬用に

Table 4. 古文献に基づくわが国紫草分布地

道 国 別		道																										
文 献		畿 内		東 海 道			南海道		東 山 道		山陰道		西 海 道		山陽道													
大和	攝津	三河	遠江	甲斐	相模	武蔵	下総	常陸	紀伊	讃岐	伊予	近江	信濃	上野	下野	陸奥	陸羽	羽后	出雲	岩見	筑前	豊後	日向	大隅	薩摩	播磨	山陽道	
常陸風土記							行方郡麻														球珠郡							
(713) (和銅6)																												
東大寺正倉院 文書 卷42																												
(736)																												
万葉集		海石郡市 横野							名高浦		蒲生郡野										託馬野							
(759)																												
延喜式 23巻 民部				200斤			3,400斤	3,100斤	3,800斤	3,600斤			3,600斤	3,300斤	1,000斤				100斤	100斤	5,200斤 幸府		200斤	1,200斤				
(927) (延長5)																												
毛吹草 巻3				○														秋田									○	
1643 (正保2)																		秋田									○	
日本實渡子 磯貝舟也編				○														秋田									○	
1691 (元禄4)																		秋田									○	
和漢三才図絵 寺島良安編 巻92 山草		山田		中泉							大洲				南部	津輕		秋田									○	
1713 (正徳3)																		秋田									○	
重修本草綱目 啓蒙巻7 山草		○		○ ○ ○				○		○ ○					南部		最上	○									○ ○	
1844 (弘化1)																											○ ○	
殖産略考 (政府)																												
1873 (明治6)																												

供すべきものとしてその用途を区別している。この用途の区別は**盛京通志**¹⁹⁾にも

根花俱紫以可染 山産粗而色紫入藥 園産細而色鮮 只可染物

と記され、しかも、この慣行はわが国の江戸紫にも見られ、栽培の黒紫根は自生の山紫根よりも染色用に歓迎されていた²⁰⁾。

7) その他；邦産種ムラサキ種子の乾燥貯蔵したものは、これを人為的育地の播種床に置床しても直ちに発芽することなく、床中の種子は冬期の寒冷による刺戟によって休眠が打破され、春期の湿潤と温暖によって胚の幼根と幼芽の萌苗を見るに到るが、これら発芽の過程においても外界の刺戟に対して鋭敏であり、乾燥などにより発芽遅延や二休眠の現象に陥り易く、野生植物の特徴を最も強固に保有している。秋播生の強い種子の植物であることが明かにされている²¹⁾。

以上、わが国古文獻に現われている紫草の記述を通じて日本本草の性格を論及すれば、紫草文化は最も古くわが国に導入され、ムラサキは利用価値の高い経済植物の一つであるに拘らず、これが利用文化の實際を具体的に伝える記述は極めて僅少である、わが国本草の多くは中国歴代本草の内容を無批判に模倣転載し、これが字義の解釈に終始しているばかりでなく、後世においても典籍の註解や考証に重きをおいている。

すなわち、わが国において本草学が地域社会の実生活に基盤をもつ、**実用の学**として発

展し得なかった主な理由は、生薬の生産を促すべき医学が、庶民の診療を担う実用の学として江戸期に独立するに到るまで、宗教社会に隷属して加治祈禱の効験を現わす方術と同居しており、また生薬の生産加工にしても太閤検地に続いた慶安3年(1649年)の裏作禁止令の解除までの封鎖々国経済の封建制度に縛られた農民は、藩幕経済の基礎を支える稲作以外の勝手作物はその栽培を厳禁されており、一方、享保7年(1722年)、和薬改会所の設置によって一部和薬が唐物の代替品として市場疎通が認可されるまで、薬種の殆んどを唐物に依存していたことなどが、日本本草の実用的発展に大きな禍根をなしている。

さらに弥生式稲米農法を踏襲するわが国の農業に較べ、大陸華北の乾燥地帯に展開した畑作犁耕農法が、薬用植物の生産技術の発展に有利であった史的背景も見逃すことは出来ない。

生薬は地理地域における生産的自然要因によって、その品位や薬能に影響見られる薬物であり、従って生薬を用いて薬治療法を施す中国伝統医学やわが漢方の医術においては、生薬の来源に帰因する療法上の差異があつて然るべきものであるが、紫草に関しては斯る薬方上の相異は認められない。しかし、紫根色素に漬けた灯心を用いて桐油を燃やしその油煤を以って**墨合せ**²²⁾する中国墨の製法や、薬種油を紫根色素にて着色した**寒暖計**すなわち、わが国の**蚕当計**²³⁾の如きは、地域社会の基層文化に密着した民族文化である。

終りに本研究に資料の便宜と助言を賜りました二松学会教授橋川時雄先生、宇都宮大学(農)教授態代幸雄先生、また有益な示唆を賜りました東京大学(薬)教授柴田承二先生、東京薬科大学教授藤田路一先生に謝意を表します。

19) 王新令等修、張九徵等編；“盛京通志”遼東 県吉林外記七(乾隆1—1736)

20) 三浦；生薬学雑誌 17 (1963)

21) 三浦；薬学研究 33 (1960)

22) 宋応星(明)“天工開物”(崇禎10—1637年)卷16, 丹青, 墨。

23) 宗田一；寒暖計の歴史補遺, 薬局, 5, 8, (1954年)

わが国医薬分業の失敗理由

清水藤太郎*

明治維新は諸事近代的に改革されたのであるが、医師は薬を売って収入を得る習慣が長く行なわれ、医師が薬を売る弊害については全く気がつかなかった。もっとも薬店主と医師となれあいで、人参などの高価薬を売りつけたことなどが、川柳や狂句などに散見するが、これらの弊を根本的に明らかにし、制度によってこれを規正することは全くなかった。

ヨーロッパ諸国においては12世紀頃から専業の薬局（薬商）が発達したが、医師が薬を売ると、「自分にない薬は用いない、いらない薬も売って収入を増す」という重大な弊があることを知って、ドイツ皇帝フリードリッヒ二世（1194～1250年）（鎌倉時代）が、有名な「医薬令」を公布し、医師と薬剤師の業務を分離し、医師の薬局所有を禁じ、両者の協同を禁じ、教育、監視、薬局方、薬価などを規定した。これが甚だよく実情を通じていたので、ヨーロッパ各国に行なわれ、ヨーロッパ人は薬は処方箋によって薬局から買うもの、医師から買うということは全く考えられないようになった。即ち医師は己れの収入に関係がないから、薬は必要な人だけに、必要な量だけを用い、全く薬の乱用を防いでいるのである。

わが国においても、明治初年から「医薬の分業」を原則として「薬剤師」なる制度を作り、医師の売薬を禁ずるのであったが、明治100年の今に至るまで「医薬分業」はほとんど行なわれない。それには次のような理由がある。

1. 江戸時代からの長い長い慣習を破ることは甚だ困難である。前述の如く民衆は薬は

医師から買うのが原則と考え、薬局で買うのは変則と今でも考えている人が多い。この慣習を破るための薬剤師団の宣伝がほとんど行なわれず、純理論だけをひっさげて議会で争うことだけに専念している。

2. 医師に比し薬剤師の数があまりに少なかった。医師も「医制」（明治7年）により、新規開業には医師試験を受けるのであったが、医師団の運動と当局者の理解により、次のように無試験で免許を与えた。

イ. 明治8年、従来の開業医は無試験

ロ. 明治10年、諸官庁、地方の公立病院に奉職し、医療もしくは教師の職にあったものは無試験

ハ. 明治10年、陸海軍軍医およびその試補であったものは無試験

ニ. 明治10年、文部省の認めた医学校卒業者は無試験

ホ. 明治15年、従来開業者の子弟であって満25才以上のものは無試験

医学教育も各地に行なわれたので、新制度による医師は急激に増加した。これに反して薬剤師（当時の薬舗主）は必ず試験を要し、しかも処方箋調剤は全く有名無実であったので受験者も少なく、明治9年6月まで試験を経て免状を受けたもの18人、10年6月、薬店数5993、うち免状あるもの22人に過ぎなかった。明治23年「薬律」施行当時、全国医師数3.8万人（内従来開業3万人）に対し、薬剤師は1700人に過ぎない。他は薬種商であった。しかもこの薬種商は、伝統の堂々たる店舗をかまえ、その地における政治的にも経済的にも有力な存在であって、同じクスリヤでありながら、これらの人達は分業運動に参加しな

* 東邦大学

いのみならず、若い薬剤師の、経済的にも政治的にも、何の力がなく、吹けば飛ぶような人達の運動にはむしろ反感をもつものが多かった。従って分業運動は、その勢力が甚だ微々たるものであった。

3. 政府当局者は薬学の発達を軽視した。

当局者は薬剤師の業権が確立しなければ薬学が発達しない、薬品製造も進歩しないで、国家経済に大なる不利であることを認識しない。歴代医薬の政局に当たったものは、中央も地方もともに医師であって、薬剤師はいずれの官庁においても医師の下につき、医師の利益は尊重されても、これに反する薬剤師の利益は常にほうむられ勝ちであった。医薬に関する制度の会議は医師側が常に絶対多数であって、しかも医師は強固な団結をなして常に当局者を圧するの傾きがあったから、医薬分業論など思いもよらなかった。

4. 薬剤師の分業運動が拙劣であった。

前述の如く業者も少なく、民衆にも当局者にも理解するものなく、政治的にも経済的にも急速強制分業は全く不可能であったにかかわらず、薬剤師の指導者は、明治23年以来、議会運動に終始し、その効を急いだのである。

医薬の如き長い習慣を改革するには、その理論と実際とをよく研究してこれを民衆に宣伝し、多くの理解者を得て初めて政府当局者を動かし得るもので、一人や二人の議員の賛成だけでは、運動はむしろ医師の反感を買うに過ぎない。まず民衆運動が第一で、議会運動は必要がない。むしろ有害である。医薬分業は民衆が理解して医師から薬をもらわなくなれば、法律は今のままでもよい。法律改正は必要がないのである。あたかもアメリカ合衆国では、法律は分業になっていないが実際に分業が行なわれている。合衆国は60年前にはわが国と同様、医師が全面的に薬を売っていたのであるが、アメリカ薬剤師会が「薬は薬局に」と早くから民衆宣伝をして実際に分業が行なわれ、年間8億万枚の処方箋が発行されている。わが国の歯科医師会も、昔は歯が

悪くても普通の内科医に行ったのであるが、明治の終り頃から「歯は歯科医師に」と各地に講演会を開いて宣伝し、今は歯がわるくて内科医に行ったら非常識と笑われるに至った。かくして歯科医師は医師会と議会などで争うことがなく、約20年にして「歯は歯科医師」を全面的に獲得したのである。

これに反しわが薬剤師会は、明治24年以来議会運動に猪突して医師会と争い、中には「医師殺人論」などをかかげて攻撃のみを事とし、医薬兼業が経済的に不利益なことを認識させるに努力しなかった。しかもこの過激運動を不可とし、まず民衆運動をなすべきことを論ずる薬剤師もあったのであるが、「急進派」の当事者は、「漸進派」の論者を「医師に薬を売り、医師の鼻いきのみを気にする商人根性」とののしり、それが日本薬剤師の大多数の賛同を得て分業資金を集めて議会運動に猪進したので、薬剤師会は二派に分かれて長年にわたり相争ったのであるから、分業運動が成功しなかったのも当然である。当時のいわゆる「急進派」の人人の所論はさきの明治薬学校長恩田重信氏著「医薬分業戦」(大正6年)にある次の論説にも見ることができる。

「医薬分業はどうしたら実現するか。

我々は直ちに對議会戦を主張する。

所謂軟派は金もうけ主義にかかられている。

医薬分業は、どうしたら早速に実行することができるか？ この問題はいわゆる「分業実行方法論」で、薬剤師仲間にも硬軟二派がある。我々はいわゆる「急進派」で、一方には帝国議会に向って迫り、一方には与論を喚起してもって気運を成熟せしめようと言うのである。今期議会に肉迫したのも、この「分業戦」を印刷して配布するのも、皆この分業実行手段である。

しかるに薬剤師のある一派は、いわゆる「軟論」を主張している。その説を摘んで言えばかようである。曰く

今の薬剤師は学問も低い、又人格も低い、世

間の人から見ると、医師の方が遙かに品位が高く見え、薬剤師に調査してもらうよりも、医師の薬室から薬をもらった方が、信用が多いように思われている。畢竟するに薬剤師は第三者から認められていない。これが唯一の「分業難」たる所以であるから、分業を実現せしめるには、まず薬剤師の学問を高くし、同時に指定薬品制度や売薬法の改正などを行なうて、まず薬剤師の実権と実力とを増進する様に取りはからうて行かねばならぬ。しかるときは薬剤師の方から分業して呉れと言われなくとも、第三者から迫まれて分業が自然に成立する。かくすれば社会制度の激烈なる変化をも見ず、円満にこの問題が解決されるのである。対議案策の如きは、徒らに医師の反感を高め、第三者から嫌悪せられるに過ぎず、害あって一利だもない、云々。

こういう風な所論が即ち軟論である。この論は我々にはまたこれの一つに恐医病論と呼んでいる。医師に関係を持っているか、または医師に薬を直接に売りこんでいて、医師にならまれば翌日から得意を失なうということをおそれるような人人の所説である。しかるざれば分業運動などに加担して暇をつぶし、金を棄てるのは愚の骨頂であると悟ったように納っている横着者の言い草に過ぎぬ。薬学博士池口慶三君、大阪薬業新聞主筆小林亀松君、三共製薬株式会社工場長湯浅武孫君などは、察するところこの軟論の主論者らしい。博士池口君は、過般「薬業の友」記

者に「いやしくも真面目に分業問題を解決せんと欲せば、予が常に唱道するが如く、薬剤師はすべからくその天職をつくし、実力を養わない、社会上の信用および地位を高むるとともに、一旦事を挙ぐるに当っては、いわゆる挙国一致の態度に出でざるべからず」と語られた。これを以て同君が、分業実行法に対する意見の軟派たることが明瞭している。

所が、薬学博士丹羽藤吉郎先生もまた「薬業の友」記者に話された事がある。

実力養成説について、薬学博士丹羽藤吉郎君（前略）とにかく私は大にしては国民衛生のために、小にしては薬剤師のために、1日も早く分業を実行せねばならぬ。それには与論を代表する議会の賛成を得る外は無いと信じている。

或は薬剤師の実力を養い、地位を高め、而して後分業運動をしようとかいう説（池口博士等の軟派説）もあるが、それはできない相談だろうと思う。薬剤師全体が金をもうけて実力が充ち、地位が向上するというようなことは百年待ってもあるまい（後略）。」

かくの如く両派がしのぎを削って相争ったが、多くの場合「急進派」が大多数の賛同を得て、しばしば議会に分業案を提出して争ったのである。終戦後、形式的には医薬分業となったが、これを實際化するには、薬剤師は民衆宣伝を気長く実行しなければならない。議会運動はむしろ有害で必要がないことがわかるであろう。

わが国における自然科学教育の芽生え

— 近代薬学発祥時期の背景 —

吉井千代田*

科学技術といっても、その範囲は広域にわたっているが、それが直接われわれの日常生活につながりが深いばかりでなく、国家経済力にも密接な関連があるので、依然その振興はつよく叫ばれている。自然科学関係の話題が世間一般の注目をひき、たとえば、国際的な学会が開催されるたびごとに、ジャーナリズムもまた好んで取材に力を入れるようになった。当然、多くの関係学会の機関誌刊行をはじめ、一般向の総合雑誌、新聞等も科学記事欄を設け、あるいは解説書も続々と発行されているが、科学の振興が、単なるスローガンや予算増額などで簡単にできるものではないことは、他の部門における場合と同様で、まずその気になって実践するということが、如何に重要であるかは、歴史的に見るとよくわかる。

歴史は変転するとともに、過去より未来へわたって連綿としてつづくものであるから、その沿革を一時期を画して論ずることは難かしいが、戦争という異常な出来事の前後を通じて、比較対照的に批判することはできる。戦争が及ぼした影響によって産業界が如何に変遷して行ったか、それと併行して、自然科学界の進歩の過程を展望することもできる。

また科学技術の発達をはかるために、創造的、意欲的な頭脳をもった研究者を育成することが、教育の目的であるとすれば、科学教育にたずさわる者もまた、その点を自覚しなければならない。たとえば、われわれは19世紀の後半以降、ドイツの化学、特に工業化学の研究が世界でも抜群であったことを認めている。しかし、よく言われているように、こ

の事は決してドイツの国民性に由来するものでもなく、また偶然そうだったものでもなく、全くドイツにおける徹底した科学教育に負うものであることを教えられる。

明治維新後は、鎖国から開国へと急進的に移り変わり、明治政府は学制を公布して教育の普及をはかるとともに、多くの外人教師たちを招いて、学術の発達、人材養成をはかった。また、盛んに留学生を海外に送って、欧米の文化を吸収するための実力を培うことに努めたが、自然科学教育、研究は、明治時代を通じて官立大学、各種試験所を中心として行なわれる程度にとどまり、ひろく民間にまで徹底するにはいたらなかった。

明治初年において、海外留学生を派遣した先は、米、英、独、仏の諸国のほか、ロシア、清国などであったが、これは外人教師に代って教育の任に当ることのできる日本人教師を養成する必要があって始められたものであり、主として文部省からの官費による者が多かった。

ここで、さらに先進国として、多くを学んだ西欧諸国における科学教育のうち、特に化学に関する例を見てみよう。

フランスは、自然科学部門において、幾多の独創的な業績と、傑出した学者を出しているが、近代科学の発祥地といえ、それはラヴォアジエやゲイ・リュサックを生んだフランスではなかった。ドイツの化学は19世紀までは、フランスのそれに比べて、むしろ後進的であった。しかもドイツが最も進歩的であったといえることは、大学に化学実験室を備え、進歩的な学生に対して化学実験の機会を

* 日本薬史学会

与えようとした点であって、世界でも先鞭をつけたからであった。

これはドイツ化学の先駆者で、有機化学の開拓者であり、かつ農芸化学の始祖でもあり、また、かの有名な尿素の合成に成功したウェーラーの研究を助けたリービッヒの功績でもあった。19世紀初期における大学の化学教育は、主として講義によるものであって、今日では原則ともいふべき実験をやるということは極めて稀であった。特に化学分析あるいは何か研究でもやろうと思う学生は、特に許しを得て教授個人の実験室を利用させてもらうよりほかなかったというから、青年時代のリービッヒが、はるばるパリに出かけて、ゲイ・リュサックの許に行ったことも、うなずかれよう。その結果、リービッヒはドイツに帰国してからギーセン大学の化学教授に任ぜられると、政府を説いて、まず化学実験室を造らせた。これは実に今から138年前の事であった。

彼の実験室には欧州各国から、教えを請うために研究生たちが集まってきたが、ドイツの化学研究が名実共に急速に進歩したのも故なしとしない。またベンゾール核の構造研究で不朽の名をのこしているケクレは、はじめは、同じギーセン大学で建築学を専攻していたが、リービッヒの感化を受けて化学の研究に転向することになり、ケクレの門下からバイヤーが出て、インデゴに始まる染料工業発達の基礎を造り、次いでインデゴの化学構造を確証したエミル・フィッシャーはバイヤーの門弟であったことを想うと、これらの代表者たちのつながる系譜をながめて、そこに人と人とのつながりのほか、それぞれの個性とか天分とか、意志とか意欲とかいうものが、運命的なものを画いて行ったことを想うべきである。

また、わが国の化学者、特にわが薬学界の偉大な先輩たとえば長井長義らも、このドイツの化学教育を範にとってきたが、ドイツの化学工業の発達には一貫した精神が流れ、そ

れが脈々として伝統的に受け継がれ、今日につづいていることを如実に示しているのである。

明治初年における自然科学関係の各部門の出身者の中には、明治時代のわが国科学界の指導的立場に立って活躍した人材が多かったが、科学教育の指導に当たった多くの外人教授の功績が大きかったことも忘れることはできない。

わが国で一般的に自然科学研究が行なわれるようになったのは明治維新以降のことであったが、すでに徳川時代においても蘭学者がオランダ語を通じて医学、天文、暦学、造兵、火薬等の研究と業績を移植している。徳川時代と明治維新後とは、政治的、社会的条件にも大きな相違はあった。しかし、いずれにせよ、蘭学者の研究が、明治時代の科学界が急速に推進されたことに先駆的な役割を果たし、その後の発展に寄与したことは否定できない。蘭学の研究は徳川吉宗という意欲的にすぐれた政治家の下に盛んになったもので、その当時の幕府の財政は極度につまり、封建制度下に在って窮乏を告げる農村の姿に心を傷め、暦の改正の必要に迫られたことによって、蘭学に関心をもつようになったものだといわれている。

かくして和蘭通詞の力を得て、青木昆陽、前野良沢、杉田玄白らの逸材が血のにじむような精魂を傾けた結果、蘭学研究は普及されて行った。まず主として医学の研究から入り、薬学も研究上の必要から、動物学、植物学、鉱物学など博物学的研究へと進んで行ったが多くは好奇的の興味本位の態度によって新知識を吸収するにとどまり、自ら精密な観察や実験にもとづいて、体系的に研究を進めて、基礎的な理論まで会得しようとする者は少なかった。

自然科学に関する知識や技術については、前述のようにわが国特有の物産学、博物学あるいは、兵器、工芸などに必要な技術として積み重ねられてきたが、歴史的に考えると、

やはり蘭学が入り、さらにひろく洋学といわれる西洋文化の伝来、導入、移入（これらの言葉には、積極的と消極的の意義の差がある）によって少数の外人あるいは書物、それらの翻訳によって伝えられ、習得されたものであって、やはり教育という体系的な形で、教えられたものではなかった。

本草学というような形で、特志な学者、あるいは研究家、同好者などによって自然科学関係の学問、趣味に関心がもたれていたことは、よく知られているが、しかもそれは実用的な立場から、同志が集まって、もしくは単独で標本を収集し、あるいは、鑑定品評を行なうなど、文献的記録をのこしているが、いわゆる教育という形で知識や技術を習得したというものではなかった。

観念的、抽象的には実証的らしい方法論も、儒教哲学として支那からの思想がわが国へ入りこんでいるが、机上論に終わっているものが多い、また工業ではなく、工芸技術にはすぐれたものが支那から伝承されているが、科学と技術が分化発展してきたとは認められない。

しかも、科学教育の根底をなす科学精神あるいは科学思想というものが、少数の人たちを除いては、一般的にはまだ芽生えていない。それには、その時代の社会情勢、たとえば封建的な政治・社会制度、鎖国主義などに禍されて埋もれていたものと考えられる。

このころは、社会情勢による科学精神の不振、封建制度による不安定な社会と、戦乱相次ぐ武家政治、最も科学的知識と技術を要する農業にたずさわる農民の無知である一方、わずかに武芸の需要からの刀剣類に関して、採鋳冶金の技術が発達したに過ぎなかった。

しかし、中には宇田川榕庵のように、化学植物学に関する新知識を組織的に導入解説して紹介し、はじめて科学精神の如何なるものかを伝えたすぐれた学者もあった。化学思想の誕生は、天保8年（1837）榕庵が「舎密開宗」を著すまで実現されず、その思想が動

きはじめ、化学研究が始まったのは、実に明治時代に入ってからであった。

蘭学の普及するにしたがって、実証あるいは実験主義的精神は、医学研究の面に最も強く現われ、次第に生物学、物理学、化学、天文学等にも及んだ。

なお産業経済を開発しようとして、たとえば、薩摩藩主島津斉彬のごときは、経済の基を物理、化学に求めるべきであるとして、いち早く反射炉の築造、ガラス器、ガス燈、電信機、火薬類、硫酸、硝酸、塩酸等の製造をはじめ、写真術にいたるまでその手を伸ばした。

幕府も各種の自然科学関係の洋書を翻訳させて、洋学の普及に努めたが、「解体新書」をはじめ、翻訳書の多くは漢文で書かれたために、この種の科学知識が一般大衆の中にまで浸透普及しない憾みがあった。

科学教育の充実をはかり、それを普及させるためには、特に先進国から新知識、技術を導入する場合には、まず語学の力に俟たなければならないことは、今も昔も変りはない。

それはあたかも2000年も地中に埋もれていたハスの実が、ひとたび発芽に適当な環境に置かれれば、芽を出し、開花することができるよう、先進国から科学精神、思想を注ぎこまれて、開発されると、彼国が長い年月をかけてやりとげたことを、極めて短時間内に発展させた明治時代のことを想うとうなずかれるのである。

明治維新を機として自然科学の発達を見たことは、幕末期、1世紀近く、特に外交関係の圧迫に刺激された多数の蘭学、洋学の徒の努力によって培われた。しかも明治以降の日本の科学は、その初期においては、輸入、移植の科学であったと言われるが、宗教以外の洋書および漢訳の禁の解かれた1720年（享保8年）以後、明治維新（1868）にいたるまでの間における諸外国からの開港要求によって、愛国心が燃え上り、医術を始め、国防上の諸技術面に経験知識もなく、わずかに彼国

の文献と、それを不完全に読解する乏しい語学力以外にたよるものなく、しかもなお文化輸入を受け入れる素地を築いていった点には頭の下がる思いがする。

薬学は、今日のように分化するまでは、まさしく医学の一部門として包含されていたことを史的に知るならば、薬学の発祥を知るためには、まず最も密接な関係にある医学教育の歩みの跡をたずねなければならない。

医学教育機関の沿革をたずねるには、安政2年(1855)、幕府に洋学所を創設したことにさかのぼって考えなければ、その後につづくめまぐるしいまでの変遷の跡を知ることは容易ではない。

そして、東京医学校に初めて製薬学科が設置されたのは、明治9年(1876)であるが、その間の推移は、次の表で示したとおりであ

る。製薬学科とはいふものの、今日の薬学の教育内容のそれとは、教育理念も、教育課程も、教育設備も、教育の任に当る者も、格段の相違があったことは、いうまでもない。

一方、未だ一般に産業と科学研究との結び付きもほとんどがなく、産業界でも、技術的に研究を進めようとする傾向も見えなかった。また、科学上の発明、発見に見るべきものなく、たとえあったとしても、それを工業的規模で企業化することは少なかった。さらに、すぐ収益をあげることができるという見透しもつかないので、科学の基礎研究に対しては、企業家は、ほとんど理解がなく、関心も薄かった。

したがって、この時代の自然科学界は、外国からの知識、技術の移入、伝来によって刺激され、促されて発達して行ったと言っても

西歴		事 項	西歴		事 項
1855	安政 2	幕府に洋学所を開設	1868	慶応 4	徳川慶喜政権を奉還し、征討軍江戸に入り、幕府の設置せる諸機関を接收。
56	安政 3	洋学所を蕃書調所と改称	"	明治 1	①開成所を開成学校と改称、②医学所を医学校と改称。
57	安政 4	蕃書調所を開く。	69	明治 2	1月から開講、7月昌平学校(昌平坂学問所=昌平黉)を本校とする大学校に統合され、その分局となり、12月①開成学校を大学南校と改称、②医学所は大学東校と改称。
58	安政 5	江戸の蘭学者たち、オランダ医学の教育研究および種痘普及のため、種痘所を造る。	1871	明治 4	大学の廃止、文部省の新設とともに独立、文部省の所管となり単に南校と改称。一時閉鎖したが学制を改めて再開、外人教師を雇入れる。
59	安政 6	シーボルト、再度長崎に来る。	72	明治 5	南校を第一大学区第一番中学校と改称。
1860	万延 1	種痘所を幕府の経営に移し西洋医学所と改称。	73	明治 6	再度開成学校と改称。
61	文久 1	大槻俊斎に次いで緒方洪庵が頭取となり、学制を改め、医学所と改称。	74	明治 7	東京開成学校と改称。医学校を東京医学校と改称。
62	文久 2	蕃書調所を洋書調所と改称。	76	明治 9	7月25日、文部省布達第104号で製薬学科設置、公布。
63	文久 3	洋書調所を開成所と改称。	77	明治10	東京開成学校、東京医学校を合併して、東京大学を新設。
64	元治 1		78	明治11	はじめて製薬学本科卒業生9名を出す。
65	慶応 1	オランダの学則に準じて、理化学、解剖学、生理学、病理学、薬剤学、内科、外科の七科を置く。	79	明治12	第2回卒業生10名とともに、製薬士の称号を受ける。
67	慶応 3	明治天皇即位、王政復古。			

過言ではなく、特に重工業は、官営事業から始まり、民間に範を示し、のち民間に払下げられるというケースが多かった。

明治維新後、日清戦争にいたるまでの間は、農業が生産部面の首位を占めていたが、日清、日露の両戦役に戦い勝った結果、資本主義経済の発達によって、一般化学工業は、ようやく興隆の機運を見せはじめた。なお、明治時代と対比する意味で、その後につづく大正時代初期の事情に触れて見よう。

大正3年(1914)第一次世界大戦の勃発の影響によって、染料、医薬品の輸入が途絶したため、市価が暴騰して市場が混乱したばかりでなく、産業、医療部面へも支障を来したので、にわかに国内の自給自足に迫られ、官民協力してあらゆる対策を尽したが、戦争による経済波瀾の変動には耐えられなかった。すなわち、染料工業をはじめ、各種化学工業は、興隆をはかる絶好の機会に出合ったのであるが、基礎的、理論的研究が未熟であったために、組織的に工業化企画をたてることができず、徒らに思案に促されているという有様であった。

製薬工業に関しては、わずかに、時の内務省の東京、大阪両衛生試験所内の臨時製薬調査部の試験的製造の報告が行なわれ、民間の製薬企業を指導育成に努めたが、これも実験規模に終り、合成技術による工業化は未だしの感があった。この事は、関連産業の幼稚であったことと、科学教育の面においても基礎的理論、実験的研究が満足に行なわれていなかったため、規模の大きな工業化企画に応ずる正確なデータも得られなかったので、設備、原材料はもとより、技術面でも自信を欠いたことも止むを得なかったのであろう。

やがて世界大戦は終結を告げ、ドイツ産業界が復興するとともに、敗戦によって失った市場回復のために、ドイツの積極的な商策に圧されて、再び染料、医薬その他のドイツ製品が輸入されるにいたり、まさに興ろうとするわが国の化学工業、製薬工業の芽は伸び悩

んだ。この事実は、今さらながら、スケールの大きな工業を確立するためには、基本的な理論と実際に基盤を置かなければ成功することは不可能であるという教訓を与えたものであった。すなわち、科学教育の重要性を痛感したのであった。

理化学研究所は、このような情勢の下に半官半民の形で設立され、その他多くの研究所が、この期を画して生まれているが、科学施設に見られる後進性については、心ある者は自然科学に理解のない政治家、あるいは文学、芸術、哲学、等の教養を持たぬ科学者たちが、相まって学問、真理に対する熱意を欠いた結果であるとさえ考えた。

また、日本人は模倣性がすぐれていると言われるが果してそうであろうか。この事は、長い鎖国期間を経て開国された以後のある時代は、外国との間に大きな差が生じていたので、そのギャップを短期間にうずめるために、必要なものを摂取するという意図で、模倣するという手段をとったことも当然であろう。われわれが今日、新しいものを開発しようとする場合においても、他によってなされた研究業績、実績を調査し、あるいは文献をさぐり、それに範をとり、参考とし、それを土台とし研究を進めるということは常法にさえなっている。これを模倣というならば、まず模倣して、しかるのち改善し、より優秀なものを造り出すということは成功への捷徑を行くことでもあり、賢明でさえあると考えられている。

くり返すようであるが、明治維新は、わが国の従来の封建制度を、政治、法律、経済、教育、軍事、外交等あらゆる社会制度にわたって改革することを促した。そのため、まず、すでに先進国である欧米諸国に、範をとらなければならなかった。それには、前述のように外人教師あるいは海外留学の経験者によって、外国語による外国の原書をテキストに用いる講義によるなど、科学教育は異常な熱意を以って行なわれた。

研究は、国際的に国や人種の別を超えて相互に啓発され刺激を受けて発達して行くものであり、如何なる国家も、個人も他の影響、恩恵に与からないということはありません。

日清、日露の両戦役を経て大正3年の第一次世界大戦開始にいたるまでの20余年間は、いわば、わが国の科学教育が、ようやく外国依存の域を脱して次第にその研究業績の水準を高めようとしつつあった時代ということが出来る。しかも、この第一次世界大戦によって、わが国は、欧州諸国のように財政的危機に陥ることもなく、かえって急速に発展した工業のために戦時利得も莫大な額に達し、対

外債務を有利に解消することができた。貿易の伸展、支那、満州に対する投資も意欲的に行なわれ、国力の充実することと相まって私立大学の開設を含む教育機関の拡張、各種研究所の増設も成り、科学教育、研究も従来の官立大学中心からようやく民間にも移り、普及されるにいたった。

かくして、明治、大正、昭和と時代は移ってきたが、明治100年を迎えるという昨今、わが科学界が世界に示す業績の中には幾多の世界的レベルに達するものがあることは、このような歴史的背景の下に生い立ったものであることを想わなければならない。

美容のヒフ科学

関東通信病院部長 安田利顕 著

増刷2版

著者がヒフに対するキャッチ・フレーズとして「ヒフは生きている」といっているようにヒフは、使った化粧品によって不気嫌になったり、また怒ったりもするので、美容についてヒフ・毛・爪の正しい知識が必要である。本書はヒフ科医としての専門家の立場から、化粧品業者、美容師、また一般の方々のために、生体の面からみた美容についての正しい知識を書いたものである。

A5判 250頁 挿図41上製 定価 1,200円 千90円

副腎皮質ホルモンと ACTHの正しい使い方

東大名誉教授 沖中重雄 編
東大名誉教授 三木威勇治

増刷2版

「副腎皮質ホルモン及び ACTH」は著効のある反面、種々の副作用もあり、適応や使用方法に微妙な点が多い。本書は、適応症、症状に応じた投与分量、投与の時期、増量、減量、中止の時期、他薬との併用、副作用及びその対策について斯学の権威者が共同執筆し、その正しい使い方を示したものである。巻末には読者の便をはかり「製剤一覧」を収録した。

A5判 242頁 上製 定価1,200円 千90円

下 総 薬 園 考

三 堀 三 郎 *

千葉県において下総台地とよばれている地域は、北西部野田市の南辺から起って、松戸市の東部、船橋市の中部を貫いて因幡沼を抱いて東方に走る一帯の台地であり、千葉県の約35%を占める広大な地域である。

この地帯は、往古富士箱根の大噴火による火山灰の堆積したもので、関東ロームとよばれる赤土の洪積層で、その上層は一般に黒褐色の有機質土壌で被われていて大きい起伏は無く、海拔20~50mの原生原野である。

この原生原野の台地は、永年にわたる住民の定着にともなって、焼畑や平地造林が行われ、江戸時代に到って一部は幕府の野馬放牧場となっていたり、一部は下総の豪族千葉氏の放牧場となっていたこともあったので、この台地には、青馬、駒返、馬洗、馬波、野馬込、駒井野、取香（とっこう、捕駒の転）などの旧地名が残っている。

元禄年間にはこの地方の良馬は幕府に献上され、残る野馬は土民に与えられていた。



徳川八代将軍吉宗は、殖産興業に力をつくし、更に医薬の業を促進し、薬草の生産に大いに力をつくし、諸国に薬草採集の使を派し、江戸にも駒場、小石川の薬園を拓いて薬草の製産を促した。

享保7年4月、下総牧場の一部（千葉郡小金原）の滝台野（現在船橋市薬園台町及び隣接の習志野町にわたる地域）に30万坪を劃し、その15万坪を当時江戸居住の桐山太右衛門に薬草の栽培を命じ、残る15万坪は、当時江戸居住の丹羽正伯に薬草の栽培を命じた。

桐山太右衛門は、当時江戸本町に薬種問屋を営み、江戸本町薬種問屋25軒の長をつと

め、幕府の和薬改会所の開設にも大いに尽力した者でもあり、薬草にくわしく、幕府の御用で各地の山野に薬草採集もしていた。

丹羽正伯は、伊勢松阪の人、代々医家であった。幕府に召されて江戸に出仕し、享保5年以来、相模、伊豆、富士山、甲斐、信濃、日光山等に派遣されて薬草見分を仰付かり、享保7年4月江戸城に召され、一代限り30人扶持を賜わり、幕府の御用医師を仰付けられ、前記小金原の一部15万坪を拝領し薬草栽培を管理していた。この時正伯が幕府から薬草栽培を命ぜられた文言は、次の通りのものと伝えられている。

其方事薬草之儀能覚罷有、近年度々御用相勤候に付て被召出、参拾人扶持被下置、御医師並被仰付候。薬草作り候地追て可相渡候間薬草作らせ可申候。

御扶持方は其方一代斗被下置候。

更に同年の別の書に、

下総国千葉郡小金野之内滝台野参拾万坪之場所内拾五万坪之所え和薬作らせ御用の薬種相納、其外は被下候間、其助成を以年々多く作らせ、世上に出候様に可致候。残る拾五万坪は桐山太右衛門に被下候間、諸事致差図、是又和薬作らせ可申候。但薬草作り候助力の為当分米穀等耕作仕候儀勝手次第に可仕候。然共、拾五万坪之内耕作仕候場所二三万坪には不可過候。この段みだりに無之様急度可相心得候。



桐山太右衛門は、薬草栽培の命を受けるや江戸から小金原に移住した。

丹羽、桐山とも15万坪の内2~3万坪は農民を入れて開墾し、米穀を作ることを許可さ

* 東邦大学

れていた。

丹羽、桐山とも各々の薬園内に生産した薬草の一部を幕府に納入し、余剰の分は、市場に販売することを許されていた。

後年にいって、これらの薬園に朝鮮人参の栽培が命ぜられたと伝えられている。

以上の下総薬園創設の時、丹羽正伯は32才、桐山太右衛門は46才であったが、薬物に関する知識は、正伯の方が上位であったのと、地位も上位であったので、太右衛門は正伯の差図を受けることになっていたと伝えられている。

太右衛門が江戸から薬園の地に移住した年月は明らかでないが、享保7年7月頃は江戸に居住していたことから、薬園へはその後の

移住と考えられる。移住後享和11年3月20日にこの地で死去し、この地に葬られている。法号は観草軒法随玄哲で享年50才であった。

太右衛門は男子がなかったので、薬園の経営も太右衛門一代限りであったと考えられている。

下総薬園に関する限り以上の記述は、概ね船橋市史の資料に拠るところが多い。



以上薬園の現在位置は、現在船橋市湊台町に隣接する薬園台町とその東に隣接する自衛隊地（往昔の習志野部隊地）及びこれに隣接する船橋市習志野町を含む一帯の廣大な地域で、正に往昔の下総薬園の地であることは明かである。

製薬業者・医薬関係者の必読書！

日本製薬技術史の研究

宗 田 一 著

上質紙美装本
A 5 判 138 頁

価 650 円 (〒 70 円)

わが国の製薬技術はどのようにして発達してきたか、本書は古代から上代・中世から近世・洋方製薬技術の伝来から幕末の製薬に至るまで、貴重な文献多数を引用し、また珍しい写真図解を数多く挿入し、非常に興味深く解説している。

製薬技術の生い立ちを知る上に他に類を見ないまとまった唯一の書というべく、この機会に、製薬業者は勿論、医薬に携わる関係者にぜひ一読をお奨めしたい。

東京都神田和泉町1-11
電話東京(866)2037・8407
振替 東京 80665 番

薬事日報社

大阪市東区道修町
2-19 山口ビル内
電話大阪(203)4191~4

リュードルフ・レーマン小伝

木村雄四郎*

○ はじめに

明治維新を契機としこれが国の文明開化に寄与した有識の欧米人の多くは、その業績も明かにされ、それぞれの方法で顕彰されているが未だその選に洩れている人達も少なくない。今や明治百年を迎えるに当り、このような外人の事績を調べることもまた、わが国の文化史に携わるものの使命の一つでもあろう。

リュードルフ・レーマン (Rudolf Lehmann) は、わが国での独逸語教育の始祖であって、明治3年(1870)10月京都の欧学舎に迎えられ明治12年8月欧学舎の独逸学校が廃止される迄、独逸語教育に従い多数の人材を育成する傍ら造船、製紙、牧畜などの殖産興業の開発に寄与した恩人であると共に、今日の京都薬科大学こそレーマンの門人達によって結成されたレーマン会が私立独逸語学校に別科として薬学科を創設したことに端を発するものである。

たまたま昭和39年創立80周年を迎えた京都薬科大学は80年史を編纂するためレーマンの事績を八方調査中奇しくも同年8月東京雑司谷墓地にレーマンの墓所が発見された。

私は畏友佐野十九一氏から早速レーマンの墓と資料調査を委嘱され、若干の資料を得たので折柄、京都薬科大学創立につながる恩人としてレーマンを紹介するため昭和39年11月21日、本会の集談会で発表した。本稿はその概要に多少加筆したものである。

○ 生い立ち

リュードルフ・レーマンは天保13年10月15日(1842)独逸 Oldenburg に生れ、父の Adolf Lehmann は当時独逸の控訴院一等判

* 日本大学理工学部薬学科

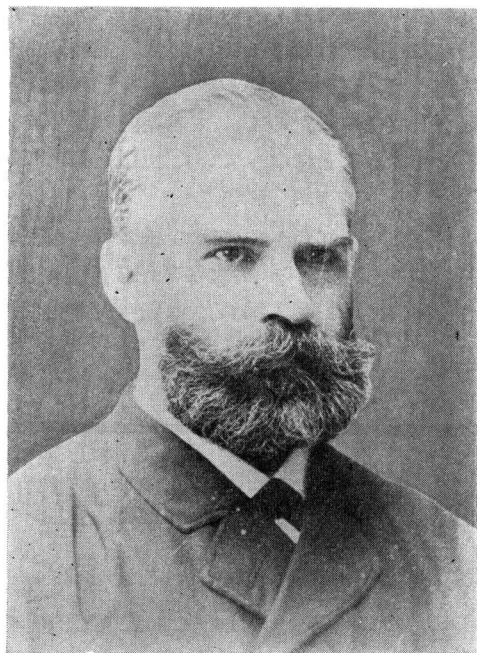


Fig. 1. Rudolf Lehmann (明治22~25年頃)

事であった。中学と高等学校とを Karlsruhe と Leyden に学び、Karlsruhe の工業大学 (Technische Hochschule) の土木工学科で河海工業と土木工学を専攻し、卒業後は土木工事に従ったといわれる。

○ 鋼鉄製川蒸気船を造る

明治2年(1869)27才で単身渡日し、大阪川口の居留地で先着の令兄が経営していた貿易商 Lehmann・Hartman & Co. LTD. に勤めその事業に協力した。彼の日本での初仕事は輸入の鋼板を組立てて3艘の鋼鉄製の川蒸気船を建造したことで淀川水域で伏見、大阪間の船運に役立った。これは、わが国最初の鋼鉄船であり、このことは明治工業史造船篇に詳しい。

○ 独逸語教育の始祖

折から京都は東京遷都の後を受けて日と共に衰微したので時の大参事(後の京都府知事)榎村正直は京都府顧問の蘭学者山本覚馬や科学者明石博高の献策を容れて広く西欧の文化を取り入れ、殖産興業を計るため外人教師を迎えて語学教育を行うことになりレーマンが大阪から迎えられた。

このことについて明治3年11月京都府では次のような布達を出している。

『各国御交際ノ道相開ケ、広ク世界ノ知識ヲ求メサセラレ候ニ就テハ西洋諸種ノ学道々伝播相成ルベク、ソノ内第一ニ言語、算数等海外諸國ニ通ズル事即今ノ急務ニ付キ、普魯西人リュウドルフ・レーマンヲ京都府ヘ雇入レ仏、英、蘭、独等の語学並数学教授セシメ候条、当官管轄華族以下伝習致シ度キ望ノ者ハ可願出候。但シ諸藩土族等ハ当地詰合ノ向伝習望ノ者ハ、ソノ藩邸ヨリ京都府ニ可願出事。』

レーマンは明治3年10月8日京都市河原町二条の角倉邸に設けられた角倉洋学所に入り京都府雇となったが京都府との契約書によると、明治3年11月から明治14年12月まで建築技師並びに語学教師として雇傭されたもので、初め月手当は200円であったが、1年後に275円に昇給している。また角倉洋学所は翌4年3月河原町二条下ル長州及び加州屋敷跡の勸業場内に移転し欧学舎と改め、まず独逸学校を開き、同年4月27日河原町二条上ル真宗高田派別院内に米人 Charles Bolduin によって英語学校を、また同年10月20日木屋町三条下ルに仏語学校を仏人 Leon Dury によって開校した。

ともあれこの当時は未だ攘夷的思想も多分に残っていたので学校の門口には竹矢来を設け邏卒(今の警察官)が警護し、かつ外人教師の出入には幾人かが護衛として附添ったといわれる。

欧学舎は明治6年6月(1873)二条城の北

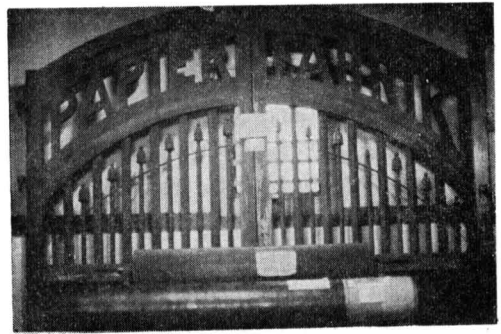


Fig. 2. Papier Fabrik (京都・梅津)の門扉、製紙博物館にて

、今の京都府庁所在地に新築し、欧学舎独逸学校と改め、同年5月独逸学校に医学予備科を設けて医学志望者に独逸語を教えたが12年5月独逸学校は京都医学校に合併して廃校となり、学生の大半は医学校に進学した。激動する明治初年の世相の一端を伺い知ることができる。すなわちこの独逸語学校こそ今日の京都府立医科大学の基礎となり、英学校はかつての京都府立第一中学校であり、現在の府立洛北高等学校の前身である。

斯くてレーマンは解職後も任期満了まで京都に止まり、明治15年(1882)2月東京に移住した。

○ 最初の独逸語辞書

レーマンは京都で独逸語教師をつとめた頃前後3回にわたって和訳独逸語辞書を出版していることも独逸語教育上注目値する、すなわち明治5年、和訳独逸語辞書2冊(京都大学図書館所蔵)、同6年9月和訳独逸語辞書2冊(滋賀大学学芸部図書館所蔵)および明治10年東京で和独対訳字林1冊(京都薬科大学図書館所蔵)のそれであって、けだしわが国最初の和独辞典とされている。

○ レーマン会と京都薬科大学の礎石

レーマンは温厚篤実で徳望が高く、教育に頗る熱心且つ懇切であったので、多くの人材が育成された。すなわち彼の薫陶を受けた門

人らによってレーマン会が結成され、彼の入洛を機会に屢々会合を催して師恩を謝したが、やがて門人の雨宮菊太郎、原口隆造、中川重麗、下河辺光行、上田勝行、栗生光謙、小泉俊太郎、半井澄ら18名の発起により財団法人京都独逸学会が創設された。次いでこれらの人達の発起により180名の寄附金を集めて、明治17年4月15日(1884)京都市上京区鍛冶屋町38番戸に私立京都独逸学校を開設し、初代校長に中川重麗が就任し、明治19年10月別科として薬学科を併設した。この薬学科こそ今日の京都薬科大学の礎石であって、いわばレーマンの徳望によって誕生したものといえよう。

今、当時の経緯を調べると明治7年初めて医薬の法令として医制が公布されて、(1874)わが国の医事制度の基礎が確立され、薬剤師の前身である薬舗主の資格や免許試験のことが規定されたが、これらの規則も当時のわが国の文化や国内事情から勘案して、まず東京、京都、大阪の3府に限って実施されたので私立京都独逸学校に別科として薬学科が併設されたのも、まず薬舗主を養成する目的で初歩的な薬学教育を初めたものであるが、けだし時代の要求によって生れたものである。

○ パピール・ファブリック

レーマンは、ひとり独逸語のみでなく英、仏語に長じ、その非凡な才能は、建築技師としても京都の文明開化に寄与するところ極めて大きく、榎村知事の顧問格として、各種の企業の献策を行ったが、その一つにわが国最初の洋紙製造工場パピール・ファブリックがある。すなわち、明治6年5月京都梅津の桂川左岸に水車で水力を利用し梅津製紙場(パピール・ファブリック)を建設に着工し、独逸より抄紙技師オットマン・エキスネルを招くと共に、抄紙機械を輸入し、ボロを原料として同9年1月13日開業したが、同13年には磯野小右衛門に払下げられ次で東京抄紙会社と合併し今日の王子製紙株式会社に発展したものでこのパピール・ファブリックこそは、

わが国洋紙製造工場の元祖といわれる。今、東京、王子の財団法人製紙博物館には当時の門扉が現存し門扉の左側に PAPIER、右側に FABRIK の独逸語名がくりぬかれてあるところなど、いかにも独逸語の教師らしく、また建築技師として彼の設計が細心でどのようなものであったかの一端を知ることができる。

○ わが国最初の牧畜場

またレーマンの進言により明治4年10月京都府愛宕郡吉田村の当時兵部省練兵場29,026坪を買収して牧畜場とし、府当局からアメリカ産牛の購入方を申請して、牝牛2頭、牝牛25頭、牡羊2頭、牝羊12頭を輸入し、アメリカ人牧畜技師を斡旋して、わが国最初の牧畜場を設置した。

このようにレーマンは京都の産業と文化の近代化をおしすすめた恩人であって、独逸人 Gottfrid Wagner や仏人 Leon Dury と共に京都の産業開発の基盤を造った足跡は大きい。

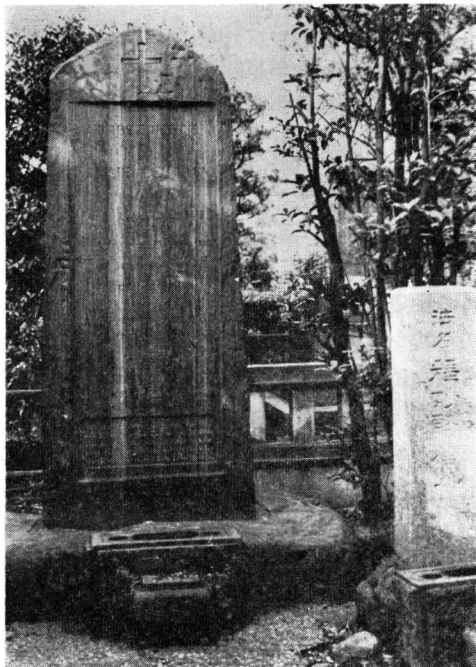


Fig. 3. レーマン家の墓(東京雑司が谷霊園にて)

○ 日独文化の交流

彼は明治15年2月家族と共に東京に移住すると共に2月から東京外国語学校で、さらに同17年9月(1884)から23年まで東京大学予備門で独逸語教師をつとめたが、23年(1896)貿易商 M. Raspe & Co. 1 の機械部主任となり次で支配人として日独貿易に寄与し、傍ら独逸アジア協会 (Deutsche Gesellschaft für Natur und Volker Kunde Ost. Asien) の創立に参画し、副会長を経て会長に就任し日独文化の交流に貢献したが、大正3年2月4日(1914)急性肺炎により72才で逝去した。日本政府は、生前の勲功により勲五等旭日章を授け、独逸政府からは王冠章2等を授与され、かつプロシヤ国名誉博士を贈られている。

○ レーマンの家族

なおレーマンは明治10年頃京都で由緒ある日本婦人、木田ベンを娶って妻とし、五男一女をもうけた。すなわち長女たに、長男 Karl、次男 Adolph、三男 Rudolf、四男 Walter、五男 Fritz で次男 Adolph の他はいずれも独逸で教育したが、ひとり次男の Adolph は、氏の後継者として両親の膝下で教育中不幸にも明治44年2月13日第一高等学校在学中腸チフスを患い22才の若さで死去した、当時は、小石川区同心町30番地(もとの小石川区役所々在地)の住宅に近い雑司谷霊園に葬ったもので同霊園第4号右側15番のレーマン家の墓所にはその後リュードルフ・レーマン並びに昭和7年6月24日急性肺炎で76才で亡くなった妻ベンと共に埋葬されている、

○ レーマン家の墓地

レーマン家の墓は遺族が独逸に在住するためほとんど無縁の状態であったことは墓域に植えられた左右一對のキンモクセイが繁茂してすっかり墓石を覆いそのため外人墓の研究家の間にも久しく不明とされていたものであ

る。墓地の面積は9,915m²(3坪)で四囲を低い鉄柵で囲み、中央の墓石は台石の上に高さ180cm. 底面の巾77.5cm. 厚さ16cm かなる自然石が建てられ、南面して上から Adolph, Rudolf, Ben の順にそれぞれ出生地、生年月日と死亡地および死亡年月日が刻まれその下段にヨハネ伝8章の31.32の聖句が独逸語で刻まれている。墓は純日本式で前面に花立て、ローソク立を設け、その右側には法名を刻んだベン夫人の墓が別に建てられ一對の献燈がある。

私は墓地の所在が明らかにされた昭和39年の秋晴れの日、親しく雑司谷霊園にレーマン家の墓にお詣りし在りし日のレーマンの偉業を偲び、いつの日にか有志達によって顕彰碑を建てたいものと念願した。

因に京都薬科大学ではリュードルフ・レーマン墓地保存会を設けて墓の管理と祭祀とを行う計画が進められている。

終りに臨み本資料の調査の機会を与えられた畏友佐野十九一氏並びに貴重な資料について御教示を戴いた東京都・都政史料館の手塚竜鷹、中央大学講師阿部秀夫、製紙博物館佐藤秀太郎の各位に対し厚く御礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 重久篤太郎：同志社高商論叢 11輯
(昭和9年)
 - 2) 明治文化と明石博高翁 104—106
(昭和17年)
 - 3) 成田 潔英：紙業叢書 第2編 192—201
(昭和27年)
 - 4) 成田 潔英：王子製紙社史附録編 36—49
(昭和34年)
 - 5) 手塚 竜鷹：洛味 No.144. 14—19
(昭和39年)
 - 6) 京都薬科大学八十年史 179—289
(昭和39年)
 - 7) 日本工業史化学工業篇 (869)
 - 8) 木村雄四郎：京薬会誌 No.42 (昭和39年)
 - 9) 徳岡 睦正：京薬会誌 No.43 (昭和40年)
- 以上

八十才をこえて (遺稿)

山 科 撫 作

台 が わ り

私は明治16年、即ち1883年に地球にあらわれたので、ことし昭和39年は満80才になる。よくまあ心臓が動きつづけたものである。

業界でも高齢者は段々少なくなって、現在私の知っている所では、90歳才で嬰鑠としてゐる小西老翁や、過日米寿の祝をされた林四郎君などで、同学の先輩には、田口文太、奥野政蔵、東京薬科大学の学長村山義温、本郷薬局の田中秀介、関西で自適してゐられる松南千寿などの諸氏位のもので、私の同級生はみな物故し、私一人生き残った。心細いことである。

よく台がわりといって、10代毎に体質その他に違和を感じるものであるが、80代となると、今までの台代りのより、ずっと変化を認め、気力が衰えはじめる。これではいけないと云いきかせて努力するが、余り効果はないようである。

教 職 3 カ 月

私は大学を卒業して、1年志願兵として軍隊生活を送った。ちょうど熊本の九州薬学専門学校（現熊本大学薬学部）に、生薬学の講義をする適任者がなく、学校も卒業させることが出来ず困って、時の校長安香堯行博士が、東大の下山教授に懇請のため上京された。

下山教室にいた私が呼ばれて、ひとつ熊本へ行って生薬の講義をしてくれ、終ったらすぐそのまま帰ってもよい、またよい所を世話してやるとの厳命であった。

私はもともと教師は蓄音機のような気がして、大きらいであったが、今回かぎりによいとのことで、先生の厳命もあり、しぶしぶ赴任し、1年間でやる講義を、3カ月ほとんど

毎日長講3時間でやった。

時は初夏のことであるし、面白くもない生薬の長時間講義ときているので、講義する方も聴くほうもいやだから、講義の間に東京の芝居ばなしなどを入れて、やっとその責を果したが、学生の中には、先生眠いから外へ出して下さい、などという乱暴者もいたが、概ね好評であった。

これでやっとの思いで郷里広島に帰り、さてこれからどうしたものかと思案の最中に、東京の池口慶三博士から、至急上京せよとの電報が来た。熊本へ赴任前に、広島で池口博士にお目にかかる機会があり、私の本意ではないが、安香博士の顔を立てて熊本へ行きますが、講義をすませたら辞任して帰郷しますから、どこかよい会社がありましたら、お願いしたいと、お頼みしておいたからであった。

三 共 生 活 50 余 年

雀躍して上京し、池口博士にお目にかかる。と、三共の越沢渦満君が辞任したから、三共へ入社したらどうかと話され、すでに三共にいた同窓足立菰薬学博士からも、入社をすすめられて、一も二もなく承諾した。

早速時の専務塩原又策氏（後の社長、三共株式会社創始者）に挨拶に行き入社がきまり、品川工場試験室勤務となり、工場長湯浅武孫氏の下で、タカジアスターゼの力価検定法の研究にとりかかった。そのころタカジアスターゼの力価検定法は、フェーリング氏液を使つての検定法で、余り正確なものではないので、アリン氏管を使つて重量法にしようと思ひ、約半年も毎日実験をつづけたが、とうとう成功しなかった。

当時の品川工場は総勢 100 名内外で、その大部分は女従業員(その頃の言葉で女工さん)で、自社品は少なく、ほとんどパークデービスその他の輸入品の小分包装であった。

女工さんは作業中は前掛をしていたが、通勤は、ほとんど和服で日本髪であった。女工の主任者は佐野嘉吉君で女工さんの元締みたいなもので、その補佐役におなかさん、おしげさんなどの女工長がいて、お師匠さんと呼んでいた。お正月の仕事始めなどは、髪も島田が多く、振袖などを着て、華やかなものだった。いわば、平素働いた成果を示すようなものであった。

奥の大作業場では、元学術顧問の東大教授下山順一郎先生が創製された、ファゴール、チオールなどの新薬を製造していた。下山先生は私の入社以前に亡くなられた。

他の一室では、田原良純博士創製の河豚毒素テトロドキシンの製薬場があって、博士の直弟子山本正巳君が主任技術者で、助手に三浦君、女工におしゆんさんがいた。奥の一角には度量器の製造といっても度盛であるが、衛生試験所から入社した丸山長四郎君などの特殊的存在があった。

向って右側の建物には、中村晴吉君が頑張っていて、朝比奈泰彦先生の子分であった関係で、過酸化水素オキシフルやデギタリス製剤パンギタールの製造をやっていた。そこで中村君のことを通称「中パン」ともいった。今でも忘れられないのは、ちょうど湯浅工場長が洋行中で、私が留守番をしている時に、ある日の午後、中村君の室でエーテルに引火し、室の前の溝に火炎が流れたので、いち早く消しとめて大事に至らなかったのは幸いだ

った。

私の勤めた試験室の隣が研究室で、大岳了君が鳩を相手にオリザニンを、赤木敦君が乳酸を、西川忠雄君がベークライトその他を研究した。これが当社研究部のはじまりで、私は研究部長、工場長を歴任した。

また思い出は会社記念日の行事であった。そのいきさつは省略して、記念日の行事としては、エビスの大日本麦酒会社の庭園で園遊会をしたのが第1回で、その後、伊香保や、本郷座の沢正総見などもあった。機械部の連中が半昼を飛ばしたので、沢正が怒って芝居をやらぬと言い出して、困ったことがあった。最後は大阪側と合同で、賑やかに伊勢参宮であった。

その後、営業部長の古田宗二郎氏の懇請によって営業部に移り、約半年で欧米へ出張を命ぜられた。1年有半、欧米特に紐育三共支店には前後1年余りも厄介になり、その間に三共社長の高峰譲吉博士が逝去され、その葬儀には会社を代表して参列した。

滞米中、特に米国薬局経営を調査し、帰朝後わが国最初のソーダファウンテンを開設した。その後、支配人、常務取締役を歴任して顧問となり、三共生活50有余年に及び、現在に至っている。

薬の会社で長寿健康であることは、見本のようなものだと云ってくれる人もあるが、余命いくばくもあるまいが、毎日出社して、会社の繁栄と将来の弥栄を楽しんでいられることは、この上もない幸福である。

附記；本稿は「三共往来」から抜萃転載したもので、図らずも絶筆となった(根本曾代子)。

日本薬学大会薬史学部会講演集

昭和30年 (東京大学)

4月10日

世界薬学の変遷画展覧

三 共 山科 撫作

製煉発蒙と遠西二十四方

明 治 薬 大 佐藤文比古

明治・大正時代の道修町及び本町

林 四郎

医薬分業の史的考察

清水藤太郎

高野長英著「客中案証」の薬品について

明 治 薬 大 平賀 敬夫

加賀藩医薬の史的考察

金沢大薬学部 三浦 孝次

日本における中世薬剤師の活動

—関東の外郎に関する研究—

千葉大薬学部 杉山 茂

元祿・享保の頃の本草の性格

大阪大薬学科 高橋真太郎

曼陀羅華について

昭 和 薬 大 赤松 金芳

クルクマとサフランの考証

大阪大薬学科

○木村 康一・藤本 豊吉・高橋真太郎

調剤の薬史学的考察

小池三良助

明治時代における薬学研究

東京大薬史学研究会

金岡祐一・北川 勲・名取信策

辰野高司・鄧 素娥・富沢 宏

辻 章夫・山川浩司・米光 宰

昭和31年 (九州大学)

4月9日

初期の軍陣医薬学 (I)

明 治 薬 大 ○佐藤文比古

海上自衛隊衛生課 安田 史郎

通俗薬を主とした獣傷救急治療

明 治 薬 大 平賀 敬夫

漢訳医薬学書

明 治 薬 大 立沢政次郎

室町時代の薬種について

(教言卿記を中心として)

久保田収 ○山下武男

本草経の薬品分類について

大阪市東市民病院 高原 篤夫

明治期における私立薬学校の特質について

東京薬大 山科撫作 ○川瀬 清

江戸末期における国産生薬の産出状況

吉田 一郎

野州日光の御種人参栽培の史的考察

星 薬 大 伊沢 一男

民間薬孫太郎虫の史的考察

大阪大薬学部

高橋真太郎 ○高橋嘉門 藤井正義

四神中の朱雀の原植物について

武田薬工研究所 渡辺 武

オランダ船舶載の薬品について

長崎大薬学部 小沢 敏夫

肥前売薬史の考証

鳥 栖 高 校 小林 肇

福岡藩薬園と内海蘭溪

昭 和 薬 大 赤松 金芳

薬園を中心とした熊本薬業史

熊本大薬学部 ○宗定哲二 村上誠愨

竜骨、竜角弁

東邦大薬学部 清水藤太郎

昭和32年 (東京大学)

4月9日

和蘭薬鏡と遠西医方名物考の刊記

明 治 薬 大 佐藤文比古

薬学史研究への民俗学的方法論の導入

岐阜薬大 宮道悦男 ○小瀬洋喜

本草集注の研究 (II)

病源所主薬による集注の研究

大阪市立東市民病院 高原 篤夫

近世莨菪考

明 治 薬 大 平賀 敬夫

駿府城下における薬史学的資料の研究 (I)

静 岡 薬 大 斎藤 幸男

明治維新期の日本薬界の展望

根本曾代子

印籠の史的考察

山下 武雄

安息香の史的考察

昭和薬大 赤松金芳 ○向後恭子

酒 石 考

明治薬大 佐藤文比古 ○橋本孝雄

日本薬局方散薬前史

明 治 薬 大 立沢政次郎

オランダ局方 (ゲールツ先生)

清水藤太郎

昭和33年 (名古屋市公会堂)

4月9日

価値植物としてのオナモミ考

山之内製薬 関屋延雄 ○三浦三郎

野州日光の人参栽培の史的考察 (II)

星 薬 大 伊沢 一男

駿府城下における薬史学的資料の研究 (II)

一東海道名物「清見寺膏薬」について

静 岡 薬 大 斎藤 幸男

愛知県薬業史の研究 (XI)

薬業の集団地域としての京町

愛知県薬剤師協会 深谷 義雄

東海地方における本草学者について

岐 阜 薬 大 宮道 悦男

明治初期における医薬品輸出入の概況

慶応大学薬化学研究所 黒田辰一郎

初期陸軍薬局方

明 治 薬 大 佐藤文比古

防衛庁技術研究所 ○遠山秀夫

飲食物の薬史的相関

根本曾代子

蘭方癌治療薬史

明 治 薬 大 小林美代子

蘭方駆虫薬史 (I)

ワカ製薬研究室 ○山下泰蔵

明 治 薬 大 佐藤文比古

芳香水剤小史

明 治 薬 大 立沢政治郎

舍利別史略

明 治 薬 大 佐藤文比古

薬科大学における薬史学講義要項

東 邦 大 清水藤太郎

昭和34年 (大阪市商工会議所)

4月9日・10日

日本調剤史 (1) 医心方

大阪市立東市民病院 高原 篤夫

錠 剤 小 史

明 治 薬 大 立沢政治郎

近代薬学の変遷

根本曾代子

裁判化学の初期史

明 治 薬 大 佐藤文比古

試薬の生い立ち

石 津 製 薬 石津作次郎

毛利藩の薬園

山口県薬剤師協会 樋口 彰一

フリードリッヒ二世の医薬分業令

東 邦 大 清水藤太郎

武蔵野ムラサキと江戸ムラサキ並びに栽培ムラサキの疑問

山之内製薬 関屋 延雄 ○三浦三郎

明治37. 8年戦役と薬品

明 治 薬 大 佐藤文比古

防衛庁技術研究本部 ○遠山秀夫

駿府城下における薬史学的資料の研究 (III)

一「府中」の薬史学的考察一

静 岡 薬 大 斎藤 幸男

蛔虫駆除薬の史的展望

昭和薬大 赤松 金芳

シーボルト及びその他の人々による日本における地衣採集品の史的解説

朝比奈泰彦

昭和35年 (東京大学)

4月5日

土師器式土器時代に栽培されていたエゴマの品種と史的考察

山之内製薬 三浦 三郎

オランダ医学初期の薬物—特にビリリについて

昭和薬大 赤松 金芳

阿蘭陀薬草功能之書について

明治薬大 佐藤文比古

幕末長崎蘭医の使用した製剤

明治薬大 佐藤文比古 ○橋本孝雄

平賀源内の薬物研究に関する考察

香川県衛生研究所 竹内 虎夫

チンキ小史

明治薬大 立沢政次郎

官版薬局方について

明治薬大 佐藤文比古

防衛庁技術研究本部 ○遠山 秀夫

蜂蜜の東漸史考

根本曾代子

昭和36年 (北海道大学)

7月20日

飯沼愼斎遺稿による採薬地の考察

岐阜薬大

嶋野 武 ○水野瑞夫 江崎秀子

江戸戯作者の売薬(滝沢馬琴)第2報

明治薬大 佐藤文比古

依百乙薬性論と和蘭薬性弁

明治薬大 佐藤文比古

海上自衛隊 ○安田 史郎

日清戦役使用薬品と陸軍薬局方

明治薬大 佐藤文比古

防衛庁技術研究本部 ○遠山 秀夫

近世新薬界の動向

日本薬史学会 根本曾代子

アイヌの薬と日本の民間薬物の形成について

山之内製薬 三浦 三郎

皮下注射剤の歴史

明治薬大 立沢政次郎

駿府城下における薬史学的資料の研究(IV)

—久能山御薬園に関する追補並びに明治,

大正時代における静岡地方の薬学の発達—

静岡薬大 斉藤 幸男

旧高松藩の栗林公園

香川県衛研 竹内 虎夫

薬局・局方の語源とその成立の歴史的背景

大阪大薬学部 高橋真太郎

(特別講演)

北海道の植物雑記

北大農学部教授・植物園長 館脇 操

昭和37年 (静岡薬科大学)

11月3日

薬科大学における薬学史講義内容・総論

東邦大 清水藤太郎

薬科大学における薬学史講義の実際

東京薬大 寺阪 正信

同上

東邦大 三堀 三郎

昭和薬科大学における薬学史講義の現状

昭和薬大 赤松 金芳

京都薬科大学における薬学史講義内容の概要

大阪大薬学部 高橋真太郎

薬学史講義の立脚点と方法論

東京教育大 吉岡 信

史的に教えることについて

千葉大 宮木 高明

駿府城下における薬史学的資料の研究(V)

—林香寺山椒—

静岡薬大 斎藤 幸男

銅の薬物起元と日本民族成立の問題

山之内製薬 三浦 三郎

飯沼愼斎遺稿による平林荘栽培植物の考察

岐阜薬大 嶋野 武・水野瑞夫

蘭方駆虫薬史(II)

明治薬大 佐藤文比古

ワカ製薬 山下 泰蔵

同 (III)

明治薬大 佐藤文比古・橋本 孝雄

文化遺品による薬史的背景

日本薬史学会 根本曾代子

洋方エキス小史

明治薬大 立沢政次郎

サムエル・コッキングとその薬業

東邦大 三堀 三郎

昭和38年 (東京薬科大学)

11月3日

わが国薬業発展の社会的考察=特に明治維新
を中心にして

千葉大 吉岡 信

研究史から見た天然産薬物の研究法

東京薬大 川瀬 清

日本薬局方中の軟膏の歴史

明治薬大 立沢政次郎

駿府城下における薬史学的資料の研究 (VI)

厚生新編の翻訳原稿について

静岡薬大 斎藤 幸男

葦葉コエンドロ考

山之内製薬 三浦 三郎

アロエの史的考察

昭和薬大 赤松金芳 向後恭子

蘭方駆虫薬史 (第4報)

明治薬大 佐藤文比古

蘭方駆虫薬史 (第5報)

ワカ研 山下 泰蔵

明治薬大 佐藤文比古

製薬革命の近代的要素

根本曾代子

(特別講演) 11月2日

明治時代におけるわが国の製薬の史的考察

東京理大 吉井千代田

近世における日本薬園史

日大薬学科 木村雄四郎

江戸時代の初期における製薬史

東邦大 清水藤太郎

昭和39年 (東京大学)

4月6日

井の頭弁天“紫灯籠”の薬史学的側面

山之内製薬 三浦 三郎

南蛮医決野忠庵 (Cristonao Ferrieira) に

いて

山口県 樋口 彰一

森立之とその自筆稿本「神農本草経攷注」について

昭和薬大 赤松 金芳

江戸期の禁書考

明治薬大 佐藤文比古

蘭方駆虫薬史 (第6報)

ワカ製薬 山下 泰蔵

明治薬大 佐藤文比古

蘭史学研究の方法論的考察について

千葉大 吉岡 信

日本の新薬宣伝史

林 四郎

丸剤小史

明治薬大 立沢政次郎

(特別講演) 4月6日午後

江戸時代における民間薬史

東邦大 清水藤太郎

近世における日本薬園史

日大薬学科 木村雄四郎

大正時代におけるわが国の製薬の史的考察

東京理大 吉井千代田

パネル討論「薬史学研究の現状と今後の問題点」

共立薬大 石坂 哲夫

金沢大 三浦 孝次

吉富製薬 宗田 一

昭和40年 (徳島大学)

10月28日

藍製剤の薬能 (制ガン)

東邦大 清水藤太郎

神農伝説の分析とわが国の農耕儀礼

山之内製薬 三浦 三郎

南蛮医術の用薬と方剤研究について

樋口 彰一

伊吹山薬園考

カイゲン柏原工場 清水 正二

蜀本草の研究—証類本草に新注加された所謂唐本草について

京大 野淵 紘・木村康一・木島正夫

西讃岐地方にて見つけた古文獻

四国鉄道局 秋元 秀夫

杉田玄端の訳述書

明治薬大 佐藤文比古

あ と が き

日本薬史学会の機関誌「薬史学雑誌」は、ようやく創刊号を世に出すことができた。本会創立以来、各年次日本薬学大会における薬史学部会で、会員各位によって行なわれた学術講演の演題ならびに演者の記録をながめると、昭和40年にいたるまでの薬史学研究の十年の歩みは、会員数はすくないながらも、多彩な姿を示しているように思う。

しかし、薬史学の在り方からすれば、あきたらぬものも散見される一方、今後機関誌を通じて、今さらながら、史学の何たるかについて、まともな認識と理解を得たいものと思わないわけにはいかない。

それゆえに、二年ほど以前から、薬史学会の発展をはかるため、会員中の同志たちが勉強の場をつくるために、随時集談会を開いて、およそ薬史的な話題をもちより、講演、見学、文献供覧などによって見聞をひろめてきた。

また、従来、薬史学会関係の主要な記録は「薬局」誌あるいは「薬事日報」紙上に掲載されることが多かったが、今後は本機関誌は、会員の研究発表のほか、薬史学関係の会合、消息などをあまさず記録し、伝えることに役立ちたい。

本誌刊行については、これまでもしばしば幹事会の議題に上ったが、種々な事情によってその実現が延び延びになり、結局はじめての機関誌でもあるので、まず各幹事分担して記事内容を整えようということになった。歳末匆忙の裡に原稿締切から校正、印刷といささかあわただしい時が過ぎた。

創刊号を一つのモデルとして、今後ひろく読者のご叱正をいただき、よりよい雑誌をつくり上げた。

なお、創刊号成るに際し、題字「薬史学雑誌」の揮毫ならびに発刊之辞を寄せられた朝比奈会長、発刊に当って所感文をいただいた村山先生をはじめ、寄稿者、広告賛助者の各位に対しても深く感謝する次第である。(吉井)

新薬の動向を示す一番新しい新薬宝典／

1966年版

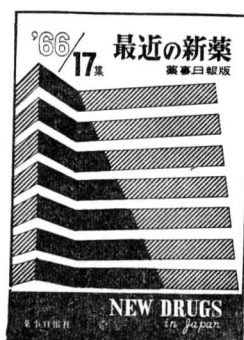
第17集

最近の新薬

A 5判 370頁

価 900 円 千70

1～17集揃7000円千実費



公正かつ正確に解説した新薬集／ トピックとしてD I・文献整理などに今後ますます重視される「医薬品の薬効分類について」の解説 1965年発表の米国USANとWHOの国際一般名の比較一覧表を掲ぐ

薬品取扱者の
のトラの巻

41

医薬品
年版 医療用品

価格表

B 5判 470頁上製本
価 2000 円 千 90

東京医薬品
工業協会編

身近な品質管理

A 5判 110頁上製本
価 350 円 千 65

宗田 一著

日本製薬技術史

限定版 A 5判 138頁
価 650 円 千 70

桜井喜一・野上 寿 著
不破電登代・福沢寿

調剤指針注解

A 5判 480頁上製本
価 2000 円 千 90

調剤指針の注解書で指針に記載のない事項も解説、薬大教材、国家試験参考書として好評

★最も信頼されている薬業界の指針

週3回タブロイド28頁建

購読料 年 千 共 3300 円

／薬事日報／

東京神田和泉町1

●振替 東京80665

日 本 薬 史 学 会 会 則

- 第1条 本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける。
- 第2条 本会は薬学、薬業に関する歴史の調査研究を行い、薬学の進歩発達に寄与することを目的とする。
- 第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。
1. 総会（毎年日本薬学会年会の時に行う）
 2. 例会（研究発表会、集談会）
 3. 講演会、シンポジウム、ゼミナール、その他。
 4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行。当分の間年2回とする。
 5. 資料の収集、資料目録の作製。
 6. 薬史学教育の指導ならびに普及。
 7. その他必要と認める事業。
- 第4条 本会の事業目的に賛成し、その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする。
- 第5条 本会の会員は会費として年額1,000円を前納しなければならない。但し学生は年額500円とする。賛助会員は本会の事業を協賛する人または団体とする。賛助会員は年額5,000円とする。
- 第6条 本会に次の役員をおく。会長1名、幹事若干名、評議員若干名。役員の任期は2カ年とし重任することを認める。
1. 会長は総会で会員の互選によって選び、本会を代表し会務を総理する。
 2. 幹事は総会で会員の互選によって選び、会長を補佐して会務を処理する。
 3. 幹事中若干名を常任幹事とし、日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する。
 4. 評議員は会長の推薦による。
- 第7条 本会に事務担当者若干名をおく。運営委員会は会長これを委嘱し、常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる。
- 第8条 本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる。
- 第9条 本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる。
- 第10条 本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする。
- 第11条 本会の年度は暦年（1月より12月まで）とする。
- 第12条 本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台日本大学理工学部薬学科内におく。
- 日本薬史学会役員（昭和41年3月現在）
- 印は常任幹事
- | | | | |
|------|--------|--------|--|
| 会長 | 朝比奈泰彦 | | |
| 幹事 | 赤須 通美 | 三浦 三郎 | |
| | 石坂 哲夫 | 三堀 三郎 | |
| | ○木村雄四郎 | 根本曾代子 | |
| | 清水藤太郎 | ○吉井千代田 | |
| （地方） | 高橋真太郎 | 木村 康一 | |
| | 宗田 一 | 塚本 赴夫 | |

新発売!!

タケダ胃腸薬

胸がやける

胃が痛む

食欲がない

食べすぎ

のみすぎ

胸やけ・げっぷなどの過酸症状をおさえ胃がスツキリします。【制酸効果】

胃痛・潰瘍痛などの痛みをとりのぞきます。【鎮痛効果】

食べ物を早くこなし、栄養の吸収を促進します

【強い消化力】

胃腸の運動を活発にして食欲をたため、胃腸の健康を守ります。【健胃整腸効果】



三層錠

120錠 45錠

顆粒

(カリユウ) 12包 32包



タケダ薬品